
IF LOVE

D a t t o

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IF LOVE

【ZPDF】

Z7927D

【作者名】

Datto

【あらすじ】

叶わないで終わると思つてた、叶うことのあるんだね、あの日のあの学校で先生と生徒とゆう関係で…

「よつちゃん」

岸松 義人キシマツヨシ

肩を叩かれ振り返った

頬に指が刺さつた

しまつた、はめられた

「引っ掛けた」

誰なのか目を瞑つてもわかる

はめられたからだ

こんなことをする

物好きでガキっぽい

女子高生はアイツしか居ない

「また、お前が苗」

奥鹿 苗

オクシカナエ

長い綺麗な黒髪

不思議なオーラ

自然児

女っ気無し

個性的過ぎる

背の高いスタイルのいい美人な

変人女子高生だ

苗は二ツと笑っていた

岸松は眉間にシワを寄せて

眉をピクピクさせていた

指が頬に刺さつたままだ

苗が何度も

笑顔でつづきを続いている

「よつちやん可愛いねえ」

「こつも向なんだよまつたくう」

よつとスネて呆れた声で言つた

苗は尚も笑顔だつた

だが、いきなり溜め息をついた

岸松はいきなり過ぎる変わり様に

少し驚いた

「どうした?」

「ああ……よつちやん……

あたし後2週間で卒業だよ

寂しこ……」

悲しげな表情で田をそらし

言った

「どうした? お前、りしへねえな」

そう言つて苗の顔を覗き込んだ

「だつて今みたいに
よっちゃんイジれなくなるか
よっちゃんのほっぺ気持ちいのに」

顔を上げ明るく言つた

でも

無理矢理な気がした

目を細め泣いているが

なんだか目が潤んでる気がした

だが、ずっと「アーティスト」の

氣のせいだと片付けた

「動機不純だぞ

それに俺のほっぺが
ボロボロになるつうのつー！」

苗のデコを人差し指で

突いた

苗は目をキュッと閉じて

すぐに目を開けまた笑った

「よっちゃんめえ

遣りやがったなあ！！

それに

よっちゃんのほっぺは
あたしのモンだから」

そういうて丶サインをして

後ろを向き

手を振りがら帰つていった

その日から苗が

岸松に近寄らなくなつた

気になる…

田が合ひ

苗が走つてその場を去る

岸松の授業では

苗は毎回保健室に行くか
に行くか

先生達に見つからない所で

うひうひうひ

2週間があつと重つ間に

あと3日…

岸松は部活の用事で

屋上にある倉庫に向かつた

夕方は、まだ少し寒い

でも、最近眠すぎるので

目を覚ますには丁度良かつた

屋上は2段になつており

2段には仕切りの壁があつて

倉庫はその壁の奥に在つた

寒くて目が覚めたが

すぐに寒さが眠さに重なり

段々体が重くなつてきた

(やつべえ無理が祟つたなあ…

早く用事済まして帰んねえと)

小走りで倉庫に向かつた

中には小さなランプしかなく

よく周りが見えなかつた

探している物がなかなか見つからない

(…-?)

いきなり体から力が抜けて

床に倒れ込んだ

(やつべえ… ハハじや 気付かれねえ…)

段々と意識が

遠退いていくのが解った

どれくらい時間が経ったのだろう

ぼんやりと目が覚めた

倉庫の中だと呟つことを

すぐ理解した

(…！？俺一人だったよな)

誰かが

岸松に後ろから抱きついて寝ていた

暖かさが伝わってきていた

目を覚まし

自分で抱きついている手を見た

…すぐに解ったよく見た手だ

更に

黄色のスカジャンが

その手を境に上の部分に掛かっていた
スカジャンもアイツのだ

耳を澄ますと

小さい寝息が聞こえた

かわいい…

手をそつと離し

寝返りをうつて

顔を確認した

やつぱりアイツだった

苗
：

その寝顔は小さい子の様だった

鼻をつまんだ

苦しそうに唸つた

目を覚ました

目があつた

こんなに顔が近いのは初めてだ

苗がニコッと笑つた

寝起きのその顔は

いつもに増して

純粋で素直で可愛かつた

なんだか顔が熱くなつてきた

「おはよ…
よつちやん」

「よつちやん」

ふわふわした声

柔らかい笑顔

薄暗い部屋の中で輝いてる

長い綺麗な黒髪

「よつちやん大丈夫?」

「大丈夫だよ
ありがとう」

笑顔で返し

黒髪をそつと撫でた

苗は少し驚いた顔をして

目を瞑り

岸松の胸に顔を埋めた

岸松もそつと抱きしめた

苗が震えてる

「寒いか……？」

苗は大きく首を横に振つた

「よつちやん…
あたし…怖いよ…」

泣いていた

泣いてる

「よつちやん…

会えなくなつちやうつよ…

寂しいよ…

よつちやんが居なかつたら
あたし…」

「苗ーー！
泣くなーー！」

岸松が辛そうな顔をしていた

岸松が辛さをよりも強く抱き締めた

苗は岸松のシャツを強く握った

「苗…

俺もお前と離れたくねえよーー!
なあ…ずっと俺といてくれよ…

寂しかった苗にずっと会えなくて
辛かつた苗にずっと避けられて

なあ…俺を1人にすんなよ
一緒に居てくれよ…なつ?「

苗が俯いたままゆっくり頷いた

岸松は苗の肩を掴んで

座らせた

尚も下を向き続ける苗

岸松の手が苗の顎に触れた

「…?」

何も言わな
す

キスをした

優しく

温かく

深いキス…

「苗…俺バカかも…」

最近になつて苗が好きつて気づいた

照れながら

苗の様子を伺いつつ言った

苗が笑つた…

「本当にバカだよ…
あたしはずううつと
初めて喋つた2年の時から…
ずううつと…」

好きだったつうの…」

苗も照れた

目が合つた

笑つた

また キスをした

「苗…なんで『』に来たの?」

「屋上は…あたしの…住処だから

「そつか…嬉しい…
苗が居てくれて…
愛してる…」

「うん…」

しばらく何も言わず

2人愛を確かめる様に

手を握つたり

キスをしたりした

2人の恋が実った日

「帰んなきやな…」

「そうだね…
つて…今何時？」

時計を見た

「やつべえ…12時だあ…
苗、ゴメンな…
早く帰んなきやな…
つて平氣か一人暮らしだもんな?」

「うん…
でも、帰る」

2人は手を繋いで倉庫から出た

外は寒かつた

上を見上げた

「… 星…」

綺麗に星が輝いていた

「ホントだ星だ…

苗はそーゆつの好きだよなあ」

「うん…」

「でも今の夜空なんてまだまだでや
苗は

1人だから行つてないと思つけど
自然の中での夜空はもつと
綺麗なんだよ…」

「ふうん…

いいなあ…

よっちゃんは

そんな綺麗な物を知つてるんだね

…誰と見たんだろ

あたしが隣りになりたいなあ

「苗つて甘えん坊だな！
俺恥ずかしながら
年＝彼女居ない歴だから…
だから誰とも見てねえよ
苗が卒業したら一緒に見に行こ」

「うん、行つて上げる」

「上からかよ（笑）

2人はそんな事を言いながら

降りて行つた

夜の学校は静かで

昼間と違う表情を見せていた

職員室には今日は徹夜組は居らず

苗が居ても平氣だった

幸運なことだ

岸松はデスクを片付け

ロツカーに荷物を取りに行き

私服に着替えた

「意外によつちゃん…
服のセンスイイねえ」

「意外つて何だよ」

「もつとダサダサかと思った
だって
たまに髪ボツサボサだから（笑）

「髪はめんどいんだもん」

沢山笑いながら駐車場に向かつた

遅いので岸松が車で送る事になつた

岸松の車は白のボックスで

中もシンプルだった

苗は家に着くまでに寝てしまった

岸松はたまに苗の寝顔を見ながら

苗の家に向かった

家に着いても苗は起きず

仕方なく玄関まで向かつた

アパートだか警備もしつかりとし

かなり綺麗なアパートだった

苗は一人暮らししだが

親が居ないわけではなく

親が海外で働いてるために

1人暮らしをしている

更に親はお金持ちなので

いいアパートに住んでいる

それに親の秘書やお手伝いさんも

沢山居るので困る」とはない

頼もしい親だ

アパートの前まで来て困った

オート・ロック

苗を起こすしかない

致し方ないことだ

折角起こさなかつたのに水の泡だ

「苗ナンバーわかんねえよ」

「……」

「苗ナンバーだけ言えればイイからあ
「

「.....5.....9.....7.....5.....*.....!」

「ありがとー

…つこでに鍵…」

後ろからヌツと手が出て来た

苗を背負っているから

苗だと分かるが

いきなり手が来ると怖い物だ

れて 苗の手から鍵を受け取り

ナンバーを打つた

「あつがとう苗もつ寝ていいよ
おやすみ」

苗は速攻で寝た

岸松はエレベーターに乗つて

苗の家まで上がつた

苗の家は

学校の用事で先生として

数回来ているので知っていた

鍵を開け電気のスイッチを探した
すぐにスイッチは見つかっ
た

リビングもここで操作できるので

玄関とリビングの電気を付けた

廊下を通り抜けリビングに出た

いつもと違った

全く生活感もなく

殺風景で

ソファーとテレビしかなかった

いつもはもっと家具があり

高級感溢れていた

苗をソファーに下ろし

廊下に出て部屋を一つづつ見て行った

3部屋中2部屋何も無かつた

1部屋は苗の部屋ひしく

ベットと机・本棚・ピアノがあつた

いくら1人だからと言つても

物が少なすぎる

それに前と違ひすぎる

前はもっとインテリアなどがあり

高級感溢れていた

リビングに戻り

苗を起こした

「おこ...曲...起きる」

苗は起きない

苗のほつペを引っ張つてみた

苗が唸つた

今度はペチペチと叩いた

緊迫していただはずが

面白くて笑ってしまった

改めてやせんと起こう

「苗ーー起きるーー

苗が寝ぼけながらも

やつと起きた

良く寝る子だ

眠そうに目を擦りながら

起き上がった

「何?

「家の母ちゃんしたんだよー?」

苗がにいつつ微笑んだ

「実家に送った
ヤケクソかなあ…」

苗は突発的なのは知っていたが

ここまでとわ

思つていなかつた

「どんなヤケクソだよ…」

呆れた

苗は更にピースまでした

「よつちやんへの恋わざりこ」

「…俺のせこかよ」

「うさ」

「なら俺がお詫びしないとな」

しばらく考え

伺うよつに

苗の顔を覗き込んだ

「生活していくそうだから…
卒業したら俺んちで生活する?」

恥ずかしがりながら

言うと苗は満面の笑みを見せた

苗は義人の頭を撫でた

義人はちょっとだけ拗ねた

苗はそれを見てから深く頷いた

「約束」

そうつ言って小指を出した

義人も小指を出し

指きりげんまんをした

長い…

長い…

長いやがる…！

校長にPTA会長早く終われ！！

誰もが感動の無い唯一の時間

卒業する

この後涙の別れが待ってる

長いよつで

短い

そんな3年間

とりあえず校長のはなしは

3年間の中で1番

長いと感じた時間だらつ

苗は隣の女子と話し

義人は先生らしく

背筋を伸ばし立っている

スーツが格好いい

髪はワックスを使い

整えられている

いつもより

大人の男と言つた感じだ

苗は喋りながらも

ちらほら見では

目に焼き付けていた

義人も苗の横顔を

たまに見ていた

目が合うことは無かつた

長い長い卒業式が終わつた

中庭で卒業生達が泣いたり

騒いだりしていた

人数が多く凄い騒ぎだ

先生達の周りには

写真を撮るため集まっていた

義人の周りにも

生徒達が集まっていた

まだ若い義人は

結構な人気振りだった

他の先生達より

生徒の数が多くガヤガヤしている

苗はその中に居なかつた

苗はその中庭自体に居なかつた

義人は少しして

その事実に気付いた

だが先生として「ココ」から

居なくなる事は出来なかつた

仕方なく時が過ぎるのを待つた

長い長い

最後のお別れが終わつた

義人は生徒に手を振りつつ

生徒用玄関に向かつた

目指すは

今日までの

3年6組5番

奥鹿 苗の下駄箱

…靴が在る

まだ学校に居る

校内ダッシュ

先生だつて今時廊下は走る

向かつたのは

6組の教室

勢いよく中に飛び込んだ

居ない

また廊下を走つた

卒業式後の校舎は

人がかなり少なく走りやすくな

そんなことに感謝

向かつたのは図書室

…居ない

階段を駆け上がる

もう足がパンパンだ

一番上まで上がった

屋上へのドア

勢いよく蹴り開けた

鉄だつたので

意外に痛くジンジンした

だがすぐに屋上を走り回った

最後に見たのは

倉庫…

苗と義人の新たな

始まりとなつた場所

「お疲れさま」

苗が倉庫の上に座つて

手をヒラヒラと振つていた

義人は息切れして

膝に手を付いていた

『……いなく……なるなよ……っはあ』

「……居なくなれないよ
どこのに居たつて

よしおやんが見つけ出すから」

『……

驚き混じり

嬉しさ混じり

顔が少し火照ったのを感じた

苗はそれを見て

満足げに微笑んでいた

小悪魔的な少女だ

「よつちやんあたし卒業したよ」

「うん、おめでとう」

「ありがとう」

苗は倉庫の上から

ジャンプして降りた

そして義人の前に立つた

「もう付き合つて
問題ないんだよね？」

「多分ね」

「なら… 言葉が欲しい」

「言葉？」

苗がニツ 「リと頷いた

すると義人は

呆れたように笑った

そしてキスをした

優しい優しい愛のキス

抱き合つ

ふわりとした温もり

「言葉じゃないよ？」

「言葉より

キスしたかつた

苗… 愛してる」

「愛してる」

叶うはずなかつた

有り得ないような恋

それでも叶つた恋

それは本当の恋

消えることは無い

愛のある生活は良いモノだ

たまには恋する

それが永遠に変わる

それでも良いんだ

これから2人で一生を生きよう

「つじや 家帰ろつか?」

「先生の家?」

「もう2人の家だよ」

「そつか」

愛は2人のすべてです

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7927d/>

IF LOVE

2010年11月13日02時36分発行